

華岡青洲の「瘍科瑣言」の成立と 写本の系統に関する研究

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成29年10月2日／受理：平成30年10月3日

要旨：華岡青洲による「瘍科瑣言」は華岡流外科の最も重要な医書であった。その内容は114の外科的疾患、それらの症状、治療法について記述したものである。疾患名とその記述の順序は中国の医書「外科正宗」に準拠しているが、記述内容は青洲の経験に基づいている。写本54本の調査の結果、1807年に春林軒に入門した三輪敬節の書写本が最も古いと考えられ、このことから「瘍科瑣言」は1808年末までには完成していたと推察される。

キーワード：華岡青洲、瘍科瑣言、外科正宗、三輪敬節、1808年

はじめに

「瘍科瑣(鎖)言」(以下「瘍科瑣言」)に統一、ただし固有の写本の題名については原本に従う)は、1835年に建立された「華岡青洲墓誌銘」¹⁾に具体的に題名が示された華岡青洲(以下「青洲」)の著述7種中の冒頭に示されている。青洲の高弟本間玄調は青洲の著述が書写の繰り返しによって書名や内容に看過できない混乱が生じているとして、後世に伝えるべき著を「青洲華岡先生遺教春林軒二十一種」(以下「二十一種」)と題し1850年に編纂・選定した²⁾。したがって、「二十一種」に収められた著述は青洲の医学の精髓とも言うべきものである。「瘍科瑣言」はこの「二十一種」の第一集の「瘍科神書」(「外科神書」など多くの異名同書がある)に続いて第二集³⁾(以下「二十一種本」)として収められていることによってもその重要性が理解される。さらに1861年の佐藤持敬の編になる「華岡氏遺書目録」⁴⁾においても、「瘍科瑣言」は「瘍科神書」に次いで二番目に掲げられている。このように「瘍科瑣言」が基本的史料において青洲の著述中の一位ないし二位に位置付けられていることは、この著が青洲の数多く

の書目の中でも華岡流の医術を学ぶ上で最も重要な書の一つであり、門人の間で必読の教科書として評価利用されていたことを示している。

このような状況は「瘍科瑣言」の写本が青洲の著述の中で「瘍科神書」と並んで最も数多く現存していることによって傍証される。例えば「補訂版国書総目録」⁵⁾は28本の「瘍科瑣言」の写本の所在を示し、また国文学研究資料館の古典籍総合データベースは、「補訂版国書総目録」に示された写本以外に52本の写本の存在を明らかにしている⁶⁾。これらには個人蔵の写本は含まれていない。著者は上記の80本以外に30本以上の写本の存在を知っているので、日本国内だけでも「瘍科瑣言」の写本は少なくとも100本以上存在していることは間違いない。少なくとも数十種を超える青洲の著述の中で、その写本が優に100本を超えて所在が確認されているのは「瘍科瑣言」以外に見当たらない。もっとも「瘍科神書」は「外科神書」などとも題されて「異名同書」が多く、それらを併せればその写本は100本を超える可能性がある。このことは「瘍科瑣言」の需要が甚だ多かったことを如実に示すものであり、春林軒の門人たちは「瘍科神書」や「瘍科瑣言」を競って書写し学

習したことが窺われる。さらに、写本の中には春林軒や合水堂の門人以外の者によって書写されたものもあるので、門人の子弟に加えて他門の人たちによっても利用されたことは間違いない⁷⁾。

このように「瘍科瑣言」は「瘍科神書」と共に華岡流の外科の骨格をなす著述と考えられ、青洲の外科を論ずる上で極めて重要であると目されるにも拘わらず、これまでその成立、内容、写本の系統を含めた事項の詳細については殆んど論じられて来なかった。今回、著者は「瘍科瑣言」について底本とされる「二十一種本」を精査すると共に、他の53本の写本を調査して「瘍科瑣言」の内容、成立および写本の系統などに関して多くの新しい重要な知見を得たので報告したい。

1. 「瘍科瑣言」に関する先行研究

青洲に関する論考は明治初期以来数百篇を数え、その中で青洲の著述に及んでいる論文も少なくない。しかし、それらの殆どは単に書名のみを列記するに留まっており、本稿で問題にしている「瘍科瑣言」の内容や写本の系統にまで言及している論文は極めて少なく、以下に示す3論考のみである。

呉 秀三は1923年に上梓したその著「華岡青洲先生及其外科」の「第三卷 青洲先生ノ著述」⁸⁾の中で、佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」⁴⁾を引用してその二番目に「瘍科瑣言 附標注 一卷」と記しているが、「瘍科瑣言」の書誌の詳細については「上下二篇ニ分タレ」と記しているのみである。呉の使用した写本が「一卷本」で、標柱のある上下二篇に分かれた一本であることが分かる。その内容については「青洲先生ガ外科的疾患トシテ之ニ処置ヲ加ヘラレタルモノ、大体ハ瘍科瑣言ニ掲ゲラレタリ」として、「癰疽」以下「委中毒」まで115の外科的疾患を列記し、そのドイツ語訳を併記している。これによって「瘍科瑣言」がどのような疾患を対象として記述しているのかの概略は知られるものの、疾患の記述の内容、この著述の成立年代や華岡流外科に占める意義などについては何ら言及されていない⁹⁾。

次いで関場不二彦は1933年に出版した著書

「西医学東漸史話」中の「青洲の著書に就ての批判」の中で「瘍科瑣言」に関して次のように述べている。

其著の「瘍科瑣言」といふは青洲外科口授の根柢本である、之を幾回か渉猟し其内容を調査するに、陳実功が「外科正宗」の解釈、抜粋を基礎として之に自家実験から出た意見と治療上の是非を記述したものと見て毫も誤り無く又、之を「正宗」の演義本となせば可である。便ち青洲が業を開き其徒弟に授けた最初の講本であつて之に由て外科疾患の品目を知らしめ其病症と治療学の大体に通ぜしめたものである。¹⁰⁾
(傍線、傍点省略)

「其徒弟に授けた最初の講本」とあることについては疑問があり、改めて考察を加えるが、関場は上記に続けて「故に其病名などは何ら『正宗』の病名と違ふ所もなく、青洲外科として此上に何等出色がないことを認める。」¹⁰⁾としている。つまり「瘍科瑣言」に示した病名は全面的に「外科正宗」¹¹⁾の病名に準拠したものであるとし、青洲独自の病名は見られないとした。このことは病理の記述においても何ら南蛮外科、オランダ外科の影響を認めることが出来ないことによって補強されるとし、治療においては蘭薬がしばしば用いられており、矛盾が認められることを関場は指摘している。関場の記述は「瘍科瑣言」の内容についての最初の詳細な言及であった。ここで留意しておきたいことが一つだけある。上述したように関場は青洲の治療においては蘭薬がしばしば用いられて矛盾が認められると指摘したが¹²⁾、関場の矛盾があるとするこの指摘は誤っている。青洲の外科の基本は漢方に基づいている。このことは、例えば、病名自体は「外科正宗」に準拠しており、手術前後の内用薬が漢方薬であり、麻酔薬「麻沸散」も漢方薬であることを見ても理解される。しかし、外科手術後の外用薬については漢方に適切な処方がなく、手術創部の処置についても具体的な方法の記述がなかったので、これについて青洲は自分が学んだオランダ流外科、つまりカスバ

ル流ともいうべき処方，方法を採用したというだけのことである。青洲の医術が漢蘭折衷派と称される所以である。したがって別に矛盾している訳ではない。

宗田 一は1980年に「近世漢方医学書集成29」（華岡青洲 一）において，収載医書の解題を担当したが，「瘍科瑣言」については以下のように簡単に解説している。

明の陳実功『外科正宗』の目次に準拠し，癰疽以下の病状・診断・治方につき詳述し薬方については「方ハ色々アリ委シクハ瘍科方笈ニ出ス」とあるように，別に『瘍科方笈』にまとめられているので，両書を併用する要がある。¹³⁾

基本的には，「瘍科瑣言」は「外科正宗」に準拠して目次が編まれ，症状，診断，治療法についても「外科正宗」に従っているとしたが，関場が指摘した治療における蘭薬の使用については何も言及していない。もちろん，「瘍科瑣言」の成立年，写本の系統の言及はない。

以上，呉，関場，宗田の記述によって「瘍科瑣言」の概要がある程度知られるものの，「瘍科瑣言」が「外科正宗」に準拠しているといっても，どのように準拠しているのか，両者間にどのような違いがあるのか，「瘍科瑣言」の成立はいつかなどの具体的なことは分からないし，100本以上の写本が門人たちによって書写された重要な著述である理由も伝わって来ない。

2. 「瘍科瑣言」の諸写本について

1) 「瘍科瑣言」の同名異書と異名同書

(1) 同名異書

現在までに閲覧できた54本の「瘍科瑣言」を題名とする写本中に，いわゆる佐藤持敬のいう「同名異書」はなかった。厳密な意味で「同名」ではないが，京都大学富士川文庫の「瘍科瑣言校考」¹⁴⁾は118疾患について，外形，外術，症治，日数，内薬などを論じたものであるが，疾患の殆どとその順序は「瘍科瑣言」と同じである。「瘍科瑣言」に見られない「膝游風」，「異症」，「鶴膝

風」，「膝瘍」，「薬毒」などの項目があって疾患数が増えている。しかし，解説文は「瘍科瑣言」と全く異なる。

(2) 異名同書

「瘍科神書」の場合，「金創」の2文字を冠する「異名同書」が非常に多いのであるが¹⁵⁾，一般的に「異名同書」を系統的に見出すことは困難である。しかし，偶々閲覧した写本中に「瘍科瑣言」の「異名同書」と思われる書を数本見出したので簡単に記述して置く。

「外科摘要」¹⁶⁾（京都大学富士川文庫本）は「瘍科瑣言」の「異名同書」である。1820年の穂田東龍（この人物は「華岡青洲先生春林軒門人録」には見えない）の序によれば，青洲の「瘍科瑣言」は外科日用に利用して便であるが，元来「外科正宗」に準拠した著述であるために記述が雑然として前後錯乱しているとして，疾患の順序を大幅に改めて「外科摘要」と題した。最初の疾患は「油風」で「白屑風」，「白禿」と続いている。しかし，各疾患の解説文は基本的には大幅に改められていない。末尾に「膏方」，「瘍科神書」からの抜粋，「巻木綿寸法」などが付け加えられている。同じく「油風」の記述から始まっている宮城県立図書館の一本（小西文庫 768）は「瘍科瑣言」と題されているが，「外科摘要」系統の写本であろう。

「異名同書」とではないが，これに近いのが，鴻池元琳の「瘍科撮要」（上中下3巻）である¹⁷⁾。著者の鴨池元琳については全く知られるところがないが，もちろん春林軒に学んだ者ではない。1827年に記された「瘍科撮要序」によれば，外科を専門にしていた医師らしい。門人たちが口述した講義を輯録して一小冊子を作ったが，本書で論じているのは「梗概」のみであり，この意味で本書は「初学之階梯」であると謙遜しているが，「吾の蘊，此に盡きるといふべからず。」とも壮語している。本書は上，中，下の3巻からなっているが，「上」の筆記者「北総 榊原賢元貞，仙台 今野亮太郎」，「中」の筆記者「東奥 伊東俊元恭，常陽 岡野倍下恵」，「下」の筆記者「仙台 小川内知元得，桑名 伊藤延宗英」はいずれも春林軒

の門人ではない、項目として疾患名を示してその概要を述べ、次にその「治法」を記述している。「上」は「癰疽」から「腸癰」まで14疾患、「中」は「癰毒」から「白屑風」まで41疾患、「下」は「耳病」から「委中毒」まで43疾患、計98疾患が記載されている。その順序に多少の異同が見られるが、これらは「二十一種本」³⁾の殆どを網羅しているといつて過言ではない。疾患名とその順序だけを見れば、「外科正宗」¹¹⁾の解説本とも解されるが、そうではない。例えば「乳癰」の項で、「懷孕ノ婦ノ病ヲ内吹ト云ヒ産後の乳病ヲ外吹ト云フ」とあるが、「外科正宗」には「外吹」の説明はない。「二十一種本」³⁾には「子アリテ生スルヲ外吹ト云。妊娠中ニ生スルヲ内吹ト云。」とある。鴨池が「瘍科瑣言」を参考にした一つの証左であろう。さらに「乳癰」の部に興味ある記述がある。「卷上」の「乳癰附乳岩」の項で乳癌に対する外科手術について言及しているのである。当該の部を以下に引用する。異体字は常用漢字に直した。句読点は著者による。

乳岩ハ至テ難治ノ病ニシテ、其術巧ナラサレハ救フ事能ワス。初起先ツペレプスヲ敷キ、或ハ烏梅羔ヲ点スヘシ。十全流氣加薏苡仁或ハ葛根加朮湯を用ウ。尚、治サレハ術ニ因テ其岩塊ヲ切り出スヘシ。其法、先ツ麻沸湯ヲ用エテ療具ヲ具エ、針ニ糸を貫ク者四五本 鈇 毛引 燒酎 酢 鶏卵 イケカン 巻木綿 サンクタラ 右ノ品ヲ備ヘ置キ、麻沸湯徹スルヤ否ヤヲ候ヒ、勇ニシテ億セサル人五六輩ニ命シ、病人ヲ抱持シテ少シモ揺動セシムル勿レ。医、患者ノ側ニ坐シ、岳塊ヲ推究シテ周廻ヲ候ヒ、岳下如何、岳上如何、廻如何ト云事ヲ詳ニシテ癰□(土偏に「力」であるが、「刀」の誤記ではないかと思う)ヲ以テ岳塊ノ際ニ下シ、塊ニ添テ周廻ノ半ハ外皮ヲ切り、猪牙ノ形ノ如シ。又、漸々岳塊ヲ四周ヲ切り出スヘシ。宜ニ随ヒ手引鈇ヲ以テモツテ岳塊出スヘシ。夫ヨリ、創中ニ固着スル悪血ヲ燒酎ヲ以テ洗淨シ、鍼ヲ以テ創口ヲ縫フヘシ。余ハ金創ノ治法ニ依ル膏ハイケカンヲ点ス。手術終テ后、内治ハ此症一定ナラサ

ル故ニ、預メ定メ難シ。古人ノ方ニ、隋臨機応変ニ施スヘシ。風寒暑湿を避ケ、飲食禁忌ヲ守ルヲ第一野養ヒトス。是唯其大概ヲ示スノミ。初学ノ輩妄ニ治ヲ施シテ誤ル勿レ。此症ノ如キハ実ニ難治ノ症トス。(この部の頭注に「吾門必是ヲ用エス。序ナレハ是ヲ載ス春林軒ノ術ナリ」とある)¹⁸⁾

これは全く華岡流の乳癌に対する外科的手術法である。この部分の記述は「瘍科神書(外科神書)」などから適宜抄出したと考えられる。全身麻酔薬として「麻沸湯」を使用し、準備すべき道具も殆んど「瘍科神書」の記述に一致している¹⁹⁾。創部に貼布する軟膏を「イケカン」と称しているが、これについては能く分らない。当時、麻沸湯を投与して手術を行っていたのは華岡青洲一門のみであったから、他門の者が「麻沸湯」を用いた手術について記述するのは避けるべきであった。頭注に「吾門必是ヲ用エス。」とあるが、自分の流派で採用していない方法をわざわざ詳細に書くまでもない。これは言い訳にしか過ぎない。「瘍科撮要」¹⁷⁾は「瘍科瑣言」³⁾を換骨脱胎したものと見えよう。

研医会図書館所蔵の「瘍科口訣」(39丁、請求記号1394703)も抄録的な「異名同書」ということが出来る。疾患の記載順序は「癰疽」、「脳疽」、「疔」となっているが、「疔」は「瓜藤疔」、「火焰疔」、「紅糸疔」などに分けて記述され、疾患の末尾は「六指」、「駢指」、「鎖陰」であり、これらは「瘍科瑣言」には見られない。

2) 「瘍科瑣言」の基本的3写本の書誌

本稿で主として使用した「瘍科瑣言」の基本的3写本の書誌についてまとめて表1に示した。「二十一種本」は前述したように本間玄調が諸写本を比較検討して正統な写本として認めたものであり、最も信拠すべき写本と考えられるのでこの写本を研究の底本とした。本稿ではその内容を基準として述べる。東京大学附属図書館鶯軒文庫所蔵の「瘍科瑣言」(以下「鶯軒本」)は、著者が閲覧出来た写本(この中には、インターネットで全頁

表1 「二十一種本」, 「鵝軒本」 および 「大塚本」 3 写本の書誌

写本名	「瘍科瑣言」(二十一種本)	「瘍科瑣言」(鵝軒本)	「瘍科瑣言」(大塚本)
請求番号	杏雨-3169 四ツ目綴, 無辺無界 半丁10行, 一行24字前後	鵝軒文庫 VII-1902 四ツ目綴, 四周双辺 無界, 半丁10行, 一行26字前後	近世漢方医学書集成所収 四ツ目綴, 四周双辺 有界, 半丁12行, 一行24字
丁数	92丁	71丁	73丁
書写者	不詳	備中新見之藩圓山道泊	不詳
書写年	不詳	1812	不詳
題箋	有	有	有
外題	二十一種	瘍科瑣言 完	伝書癰科瑣言 全
内題	瘍科瑣言	瘍科瑣言	瘍科瑣言
上篇/下篇	二卷(上篇, 下篇) 「鷺口瘡」から下篇	上篇の記述なし 「鷺口瘡」から下篇	上篇, 下篇に分かれず
目次(目録)	目次	無	有(目次ないし目録之記述なし)
最初と最後の疾患	癰疽, 委中毒	癰疽, 委中毒	癰疽, 嵌甲疽
収載疾患数	114	114	116
注	40丁裏までの下篇が先に綴られて, 41丁表からの上篇がこれに続いている。	40丁表から下篇上篇, 下篇の乱丁はない。	

の画像を確認できるものも含む)ないし複写を取得できた写本の中で最も古い年紀が明記されているものである²⁰⁾。写本の末尾に「文化九年壬申之春写於春林軒外塾 備中新見之藩 圓山道泊」とある。春林軒の門人録^{21,22)}で調べて見ると、「備中国」の部の冒頭に「文化9年(1812)1月24日岡山道作 備中新見関但馬守家中」とある。入門時期と写本の書写の時期に矛盾はなく所属も同じで問題はない。姓名は写本では「圓山道泊」であるが、門人録では「岡山道作」と異なっている。門人録は自書ではなく本人が提出した書面を転写して出来たものと見られるから、その過程で「圓」が「岡」に、「泊」が「作」に誤記されたと解釈される。比較的誤記され難い「山」と「道」が正しく書写されている。写本は自書したと思われるからより信頼性が高く、「圓山道泊」を以って正とすべきであろう。このことは地元の資料にも「圓山道伯」とあることによって傍証される。「伯」は「泊」と同音であり、若年時には「泊」としたが、後に「伯」と改めたかも知れない^{23,24)}。

「瘍科瑣言」(大塚本)(以下「大塚本」)²⁵⁾は大塚敬節の所蔵本で、「近世漢方医学書集成29, 30」の「華岡青洲(一, 二)」が編まれた際、善

本として「華岡青洲(一)」中に収載されたものである。書写者や書写年も知られず、善本である根拠が何も示されていないが、ある程度の根拠があって収載されたのであろう。丁寧に書写された写本である。

以上の写本間で認められる大きな差は、上篇、下篇に分かれているか否か、目次(目録)があるかないかの違いだけで、その他の項目(見出)、本文の内容に大きな差はない。

著者が閲覧できたか、あるいは複写を取得できた写本は以上の3本以外に51本、合計54本であるが²⁶⁾、これらの写本の内容は全体的に見れば「二十一種本」と大きく変わる所はない。ただし、「異名同書」と思われる写本もあるが、詳細は前述した通りである。全体として上篇、下篇に分かれているか、目次(目録)があるかないかの違い以外に、疾患の記述順序が異なっているもの、また「耳痛」と「耳病」、「歯痛」と「歯病」などの用字が異なっているもの、送り仮名の違いが認められるものがあるが、これらは「瘍科瑣言」の写本の系統を考える上では有用であろうが、その成立を考える上で重要とは考えられないので、必要に応じて引用して考察を加える。したがって、次

節において「二十一種本」,「鶚軒本」,「大塚本」の3写本を中心に述べる。

3. 「二十一種本」,「鶚軒本」,「大塚本」の3写本に記述されている疾患

呉はその著書「華岡青洲先生及其外科」の「第二巻 青洲先生ノ外科(主トシテ其手術)」の「第二 手術各論」において外傷と外傷以外に分類し,「外傷以外ノ外科的疾患及び其手術」において,「青洲先生ガ外科的疾患トシテ之ニ処置を加ヘラレタルモノ、大体ハ瘍科瑣言ニ掲ゲラレタリ。」⁹⁾として「瘍科瑣言」の「上下二篇本」(1巻)

を参考にしているが,呉の使用した写本を特定できない。この写本に示された疾患数は「癰疽」から始まって「委中毒」まで115を数える。「二十一種本」の末尾に見られる「陰毒」の前に「河豚毒」の一疾患が追記されているからである。このために「二十一種本」の114疾患より一つ多い115疾患となっている。「河豚毒」は「外科正宗」¹¹⁾にも見えない。

これに続いて,呉は「其分類ト云ヒ,序次ト云ヒ,殆ンド系統的ノ編成ヲ見ズ,中ニハ同一種ノモノノ重複シ掲出サレテアルハ,先生ガ古来ノ病名ニツキテ之ガ説明ヲ試ミタルニモヨルナルベ

表2-1 「瘍科瑣言」の3写本に披見される疾患の比較

二十一種本 ¹⁾	鶚軒本 ²⁾	大塚本 ³⁾	二十一種本	鶚軒本	大塚本
癰疽	○	○	腦疽	○	○
疔	○	疔瘡	脫疽	○	○
瘰癧	○	○	鬚疽	○	○
腸癰	○	○	臟毒	○	○
痔	○	○	下疳	○	○
便毒	○	○	囊癰	○	○
懸癰	○	○	腎癰	○	○
楊梅瘡	○	○	結毒	○	○
咽喉	○	○	時毒	○	○
瘰癧	○	○	肺癰	○	○
多骨疽	○	○	流注	○	○
乳癰	○	○	附骨疽	○	○
陰瘡	○	○	傷寒發頤	○	○
癩癧	○	○	小腹癰	○	○
鶴口疽	○	○	龍泉疽虎鬚毒	○	○
石榴疽	○	石榴疽	穿踝疽	○	○
大麻風	○	○	翻花瘡	○	○
腋癰 脇癰	腋癰 脇癰	○	鼻痔	○	○
骨槽風	○	○	癩風	○	○
齒病	齒痛	齒痛	腦漏(鼻淵)	○	○
破傷風	○	○	打撲	○	○
湯澆火傷	○	○	甲疽	○	○
齒唇	○	○	疥癬	○	○
天蛇毒	○	○	頭痛	○	○
合火毒	○	○	衄血	鼻血	○
牙縫出血	○	○	血箭血志	○	○
鴛掌風	○	○	腎囊風	○	○
疥瘡	○	○	臙瘡	○	○
血風瘡	○	○	頑癬	○	○
膿窠瘡	○	○	凍風	○	○
火丹	○	○	天泡	○	○
肺風粉刺酒查鼻	○	○	雀班	○	○

シ。」⁹⁾とある。しかし、呉のこの考えは誤っており、青洲は「瘍科瑣言」の疾患名を全面的に「外科正宗」に準拠しているのであって、これを以って「殆んど系統的ノ編成ヲ見ズ」と評するのは見当違いであろう。青洲はあくまでも「外科正宗」の疾患の配列に従ったのであって、恣意的に疾患を羅列したのではない。これは門人が「外科正宗」を参照するに際して役立ったであろう。

使用した3写本に披見される疾患を表2-1、表2-2に示した。記載の順序は「癰疽」、「腦疽」、「疔」と左側の疾患から同じ列の右側の疾患へ、そして次列左側の疾患へと続く。「二十一種本」と「大塚本」は目次を有するが、目次と本文の見出し（疾患名）と異なっている場合は、本文の記

述に従った。表2-1、表2-2によって3写本間で収載疾患名と疾患数に殆んど差がないことが理解できよう。もちろん、表中に認められるように用字上で少数の違いが認められるが、大勢において変わりはい。

4. 「二十一種本」の疾患と「外科正宗」の疾患との比較

表3は「二十一種本」³⁾中の疾患が「外科正宗」¹¹⁾中に見出されるか否かを検討したものである。「外科正宗」¹¹⁾では「目録」は「疾患名+順番」の形で記述されており、例えば「腦疽」は「腦疽論二十一」、「大麻風」は「大麻風五十三」、「黒子」は「黒子一百六」という風に記述されている。し

表2-2 「瘍科瑣言」の3写本に披見される疾患の比較

二十一種本 ¹⁾	鶺軒本 ²⁾	大塚本 ³⁾	二十一種本	鶺軒本	大塚本
油風	○	○	白屑風	○	○
耳病	○	○	漆瘡	○	○
竹木刺	○	○	瘰癧瘡	○	○
疥癩	○	○	痰泡	○	○
癩風	○	○	濕腫	○	○
咬傷	○	○	風犬傷	○	○
面生黎黑班	○	○	劔叩風	○	○
枯筋筋	○	○	脚了	○	○
手足破裂	○	○	眼丹	○	○
黒子	○	○	眼胞菌毒	○	○
体気	○	○	白禿瘡	○	○
奶癬	○	○	蟾供頭	○	○
遺毒爛班	○	○	蟻蛄串	○	○
小兒痘風瘡	○	○	赤遊丹	○	○
走馬疔	○	○	重舌	○	○
胎瘤	○	○	鴛口瘡	○	○
痘癰	○	○	痘疔	○	○
黄水瘡	○	○	大人口破	○	○
臭口螺	○	○	牛裡塞	○	○
僵螂蛀	○	○	田螺泡	○	○
腰痛	○	酸痛	陰虱	○	○
葡萄疫	○	○	百虫入耳	○	○
惡虫叮咬	○	○	誤吞針鉄骨硬咽喉	○	誤吞針鉄骨哽
中砒毒	○	○*	陰毒	○	○
失榮	○	○	委中毒	○	○**

注：1) 「青洲華岡先生遺教春林軒二十一種二集」(公益法人武田科学振興財団杏雨書屋)所蔵。請求番号 杏3169-1。

2) 東京大学総合図書館鶺軒文庫所蔵。請求番号 VII-1902。

3) 大塚敬節所蔵本(近世漢方医学書集成29 華岡青洲(一))所収

○：同じ疾患の項目が記載されていることを示す。用字が異なる場合は、別に記した。

*：この次に「河豚毒」の項が挿入されている。

**：この次に「嵌甲疽」が挿入されている。

表3 「二十一種本」の疾患と「外科正宗」の疾患の比較

癰疽……1～20	腦疽……21	疔(瘡)……22	脫疽……23	瘰癧……24
鬚疽……25	腸癰……33	臟毒……34	痔……35	下疳……36
便毒……37	囊癰……38	懸癰……39	腎癰……40	楊梅瘡……41
結毒……42	咽喉……26	時毒……27	瘰癧……28	肺癰……29
多骨疽……43	流注……30	乳癰……31	附骨疽……32	陰瘡……44
傷寒癰頤……45	癰癧……46	小腹癰……48	鶴口疽……49	龍泉疽虎鬚毒……50
石榴疽……51	穿踝疽……52	大麻風……53	翻花瘡……54	腋癰胸癰……55
鼻痔……57	骨槽風……58	癩風……59	齒病……60	腦漏……61
破傷風……62	打撲……63	湯洗火傷……66	甲疽……67	齒唇……68
疥癬……69	天蛇毒……70	頭痛……71	合火毒……72	衄血……73
牙縫出血……74	血筋血疔……75	驚掌風……76	腎囊風……77	疥瘡……78
腫瘡……79	血風瘡……80	頑癬……81	膿窠瘡……82	凍風……83
火丹……84	天泡……85	肺風粉刺查鼻……86	雀斑……87	油風……88
白屑風……89	耳病……90	漆瘡……91	竹木刺……92	瘰癧瘡……93
疥癬……94	痰泡……95	癩風……96	濕腫……97	咬傷……98
風犬傷……99	面生黎黑斑……100	劔叩風……101	枯筋箭……102	脚了……103
手足破裂……104	眼丹……105	黒子……106	眼胞菌毒……107	体気……108
白禿瘡……109	奶癬……110	蟻供頭……111	遺毒爛斑……112	蝮蛇串……113
小兒痘風瘡……114	赤遊丹……115	走馬疔……116	重舌……117	胎瘡……118
鷺口瘡……119	痘癰……120	痘疔……121	黃水瘡……122	大人口破……123
臭口螺……124	牛裡蹇……125	僵螂蛀……126	田螺泡……127	腹痛……128
陰虱……129	葡萄疫……130	百蟲入耳……131	惡虫昨咬……132	誤吞針鉄骨哽……134
中砒毒……135	陰毒……138	失榮……139	委中毒……なし	

*: 数字は「外科正宗」の目次の番号を示す。例えば、「21」は「外科正宗」目録の「21」、つまり「卷之二 腦疽論二十一」、「105」とあれば「外科正宗」の「105」つまり「卷之四 眼丹一百五」を指す。

たがって、この数字によって疾患の記載の順番も分かる。

「外科正宗」¹¹⁾ 全四巻に収載された疾患について簡単に記す。第一巻は「癰疽」についての原論、総論、そして各論的な記述が第一から二十までである。したがってこの巻は「癰疽」の1疾患のみの記述である。因みに目録では「第一」から「第十二」までは「第」がつくが、「十三」以降は「第」が付かない。ただし本文中ではいずれも「第」が付されている。「第二巻」は「腦疽論二十一」から「肺癰論二十九」までの9疾患、「第三巻」は「流注論三十」から「多骨疽論四十三」までの14疾患、「第四巻」は「陰瘡論四十四」から「医家十要百六十」までであるが、実質的には「失榮症一百三十九」、「唇風一百四十四」までの95疾患、総計119疾患である。「陰毒一百三十八」、「失榮症一百三十九」、「唇風一百四十四」を除く「落下顔拿法一百三十六」から「医家十要百六十」まで

の22項目は製薬法、歌などで具体的な疾患名ではない。

表3によって「二十一種本」に披見される114疾患の内、最後の「委中毒」を除く113疾患(99.1%, 113/114)が「外科正宗」に見出されることが分かった。しかも「瘍科瑣言」の疾患の配列は「外科正宗」のそれに大方倣っていることも判明した。以上によって「瘍科瑣言」の記載疾患とその順序が全面的に「外科正宗」に従ったものであり、青洲が自分の考えで恣意的に配列したものではないことが理解される。このことは、青洲が理解し、門人に示した外科疾患の体系は「外科正宗」¹¹⁾のそれであったということを示している。

5. 「瘍科瑣言」の疾患説明文中の「外科正宗」への言及

表4に「二十一種本」³⁾の疾患説明文中に、例えば「正宗ニモ詳ニシテ」とか「正宗ニ云ル如

表4 「二十一種本」の疾患解説文中の「外科正宗」への言及

癰疽……8	腦疽……2	疔(瘡)……3	脫疽……2	瘰癧……0
鬚疽……0	腸癰……1	臟毒……2	痔……0	下疳……1
便毒……0	囊癰……0	懸癰……1	腎癰……1	楊梅瘡……0
結毒……0	咽喉……3	時毒……0	癭瘤……1	肺癰……0
多骨疽……0	流注……2	乳癰……0	附骨疽……1	陰瘡……3
傷寒發頤……2	痲癩……0	小腹痛……2	鶴口疽……1	龍泉疽虎鬚毒……0
石榴疽……0	穿踝疽……0	大麻風……0	翻花瘡……1	腋癰胸癰……1
鼻痔……1	骨槽風……1	癩風……2	齒病……2	腦漏……0
破傷風……0	打撲……0	湯澀火傷……0	甲疽……0	齒唇……0
疥癬……0	天蛇毒……0	頭痛……0	合火毒……0	衄血……0
牙縫出血……0	血箭血疔……1	鴛掌風……0	腎囊風……0	疥瘡……0
腫瘡……1	血風瘡……0	頑癬……0	膿窠瘡……0	凍風……0
火丹……1	天泡……1	肺風粉刺查鼻……1	雀斑……1	油風……1
白屑風……0	耳病……0	漆瘡……0	竹木刺……0	瘰癧瘡……2
疥癬……1	痰泡……0	癩風……0	濕腫……0	咬傷……1
風犬傷……0	面生黎黑斑……0	劔叩風……0	枯筋箭……0	脚了……1
手足破裂……0	眼丹……0	黒子……0	眼胞菌毒……0	体気……1
白禿瘡……0	奶癰……0	蟾供頭……0	遺毒爛斑……0	蝮蛇串……0
小兒痘風瘡……0	赤遊丹……0	走馬疳……0	重舌……0	胎瘤……0
鷺口瘡……0	痘癰……0	痘疔……0	黃水瘡……1	大人口破……0
臭口螺……1	牛程蹇……0	僵蟻蛙……0	田螺泡……0	腹痛……0
陰虱……0	葡萄疫……0	百蟲入耳……0	惡虫昨咬……0	誤吞針鉄骨哽……0
中砒毒……0	陰毒……0	失榮……0	委中毒……**	

*：数字は言及回数を示す。

**：「外科正宗」に疾患名の記述がない

ク」などと「外科正宗」¹¹⁾に言及した箇所(疾患)と回数を示した。その言及は114疾患中37疾患(32.5%, 37/114)で、その回数は総計59回に及んでいる。これらの言及に関しては、参考にした3写本間で殆ど一致している。このことは「瘍科瑣言」はその疾患の項目や記述順序のみならず、記述内容も「外科正宗」を大いに参考に行っていることを示している。もちろん、青洲は「外科正宗」以外に「証治準繩」(「癰」の説明文中、以下同じ)、「靈枢」(「腦疽」)、「万病回春」(「咽喉」)、「医学大要」(「大麻風」)、「医学入門」(「血風瘡」)、「千金方」(「膿窠瘡」)、「素問」(「天泡」)、「諸病源候論」(「蝮蛇串」)などの書を参考にしているが、その数は少数で、引用回数もそれぞれ1~2回に留まっている。また「蘭説ニ……」(「腋癰 脇癰」)とあってオランダ流外科の説を引用している個所も一カ所見られるが、その出典は明らかではない。

6. 「瘍科瑣言」の乳癰の説明文と「外科正宗」の乳癰の説明文の比較

「瘍科瑣言」の疾患説明文と「外科正宗」¹¹⁾の疾患説明文の具体的違いを調べるために、まず青洲が外科疾患の中でも大なる関心を寄せた「乳房」の疾患「乳癰」の説明文について、3写本で比較してみたいと思う。最初に「二十一種本」³⁾の説明文を以下に掲載する。句読点は著者による。異体字は常用漢字に直した。

乳癰ハ乳汁ハリテ熱ヲ生シ結腫スルナリ。子アリテ生スルヲ外吹ト云。妊娠中ニ生スルヲ内吹ト云。初起、寒熱往来シテ腫レ、色付痛ムナリ。癰疽ナトトハ違ヒ、速ニ腫ルハ也。日数長引ソウナル者ハ、薬ヲ用テ乳汁ヲ止ムレハナンキ少シ。則、八物湯ニ神曲麦芽ヲ加ヘ用ヘシ。又、別ニ奇方アリ。初起、葛根加桔石或柴胡加

石括萎橘葉散ノ類用ヘシ。スヘテ乳病ニ橘ヨク
 応スル者也。膏ハ先鋒ヲ用ユ。散ズンハ、大牡
 ニ伯州ヲ兼用スレハ、是非ウム者ナリ。膿ニナ
 レハ、透膿散ヲ用ユヘシ。凡テ、妊娠中ハ散シ
 易シ。産後ハ散シ難シ。又、乳孔塞リテ腫ル、
 ニハ、麦門通草ヲ加ヘ用。又、瓜蒌^二銭、乳香^五
 分 以美酒送下。又、葱白湯ニテ乳房ヲ蒸スヘ
 シ。又、乳汁ノトマリタルニハ、露蜂房一味服
 スルモヨシ。又、乳癰ハメイチャヲ不入シテ、
 腐肉取レソコナヘハ、乳漏ニナル也。能、破敵
 メイチャヲ入、腐肉ヲ取ルヘシ。或ハ、ロウサ
 ワトロテンキテルメラヲ以テ洗之。然レ共、毎
 度洗ヘカラス。或、膏中ニ丹礬ヲ加ヘ用。煎湯
 ハ大牡ニ伯州兼用ス。後ニ白膿少シツ、出テ赤
 肉ヲ見ル寸、伯州散ヲ止メ、葛根加朮附ニ粉丸、
 端的丸ヲ用ユヘシ。補ノメイチャヲサシ、夫
 ニテ不癒寸ハ、切テ取ル也。乳漏ニ三年モ不癒、
 膿水不尽者、治療別ニ手段アリ。門ニ入りテ親
 炙スルニ非レハ、其術ヲ得ル事能ハス。大牡ハ
 毒アリテ膿少ナキニ用ユ。然シ、盜汗、発熱ナ
 トアラハ、用ヘカラス。初起、梅核ノ如キ者出
 テシツカリト硬ク、半年モシテ不痛者ハ、后ニ
 漸ク大ニナル也。油断スヘカラス。必乳瘤也。
 他ノ症ハ、必ス痛ムカ、又半年モシットシテ居
 ス者也。乳核ハ乳岩トハチカヒ、トコヤラ軟ナ
 リ。久シク消セス。折々核痛ムナリ。又、膿ニ
 ナラス者ハ、夏枯草煎宜シ。又、乳房ニ小核ニ
 ツモ三ツモ出ルヲ乳癰ト云。是モ夏枯草煎ヲ用
 ユヘシ。乳病ノ事ハ委クハ別ニ乳岩準附録ニ見
 ユ。²⁷⁾

次に「鶚軒本」の当該の説明文を以下に示す。

乳癰ハ乳汁ハリテ熱ヲ生シ結腫スルナリ。子
 アリテ生スルヲ外吹ト云。妊娠中ニ生スルヲ内
 吹ト云。初起、寒熱往來シテ腫レ、色付痛也。
 癰疽杯トハ違ヒ、速ニ腫ルナリ。日数長ヒキソ
 ウナル者ハ、薬ヲ用テ乳汁ヲ止レハ難義少シ。
 則、八物湯ニ神曲麦芽ヲ加ヘテ用ユヘシ。又、
 別ニ奇方アリ。初起、葛根加桔更石羔柴胡加石
 括萎橘葉ヲ用ユ。チラサレハ、大牡ニ伯州ヲ兼

用スレハ、是非ウム也。膿ニナレハ、透膿散ヲ
 用ヘシ。凡テ、妊娠中ハ散シ易シ。産後ハ散シ
 難シ。又、乳孔塞リテ腫ルニハ、麦門通草ヲ加
 ヘ用。又、瓜呂^二銭、乳香^五分 以美酒送下。葱
 白湯ニテ乳房ヲ蒸スヘシ。又、乳汁ノトマリタ
 ルニハ、露蜂房一味服スルモヨシ。又、乳癰ハ
 メイチャヲ不入シテ、腐肉取レソコナヘハ、乳
 漏ニナルナリ。ヨク、破敵メイチャヲ入、腐肉
 ヲ取ルヘシ。或、コフラワトロテンキテルメラ
 ヲ以テ洗之。シカレ共、毎度洗フヘカラス。或、
 膏中ニ丹礬ヲ加ヘ用、煎湯ハ大牡ニ伯州兼用
 ス。后ニ白膿少ツ、出テ赤肉ヲ見ル寸、伯州散
 ヲ止、葛根加朮附ニ粉丸、端的丸ヲ用ユヘシ。補
 ノメイチャヲサシ、ソレニテ不癒寸ハ、切りテ
 取ル也。乳漏ニ三年モ不癒、膿水不尽ノモノ、
 治療別ニ手段アリ。門ニ入テ親炙スルニ非レ
 ハ、其術ヲ得ル事アタワス。大牡ハ毒アリテ膿
 少ナキニ用ユ。シカシ、盜汗、発熱杯アラハ、
 用ユヘカラス。初起、梅核ノ如キ者出、シッカ
 リト硬ク、半年モシテ不痛モノハ、后ニ漸ク大
 ニナルナリ。油断スヘカラス。必乳瘤ナリ。他
 ノ症ハ必痛ムカ、又半年モシットシテ居スモノ
 ナリ。乳核ハ乳岩トハチカヒ、ドコヤラ軟ナリ。
 久ク消セス。折々核痛ムナリ。又、膿ニナラス
 者ハ、夏枯草煎宜シ。又、乳房ニ小核ニツモ三
 ツモ出ルヲ乳癰ト云。是モ夏枯草煎ヲ用ユヘ
 シ。乳病ノ事ハ、委クハ別ニ乳疾方箋^{マツ}ニ用。²⁸⁾

最後に「大塚本」では「乳癰」の説明文は以下
 のようになっている。

乳癰ハ乳汁ハリテ熱ヲ生シ結腫スルナリ。子
 アリテ生スルヲ外吹ト云。妊娠中ニ生スルヲ内
 吹ト云。初起、寒熱往來シテ腫、色付痛ムナリ。
 癰疽ナトハ違ヒ、速ニ腫ルナリ。日数長引ソ
 ウナル者ハ、薬ヲ用テ乳汁ヲ止レハ難儀少ナ
 シ。則、八物湯内加麴麦用ヘシ。又、別ニ奇方
 アリ。初起、葛根加桔石或ハ柴胡加石或ハ瓜蒌
 橘葉散ノ類ヲ用ヘシ。凡テ乳病ニハ橘葉能
 応スル者ナリ。外ニハ先鋒ヲ貼ス。散ラスンハ、大
 牡ニ伯州ヲ兼用スレハ、是非膿モノナリ。膿ニ

ナレハ、透膿散ヲ用ヘシ。スヘテ、妊娠中ハ散シ易ク、産後ハ散シ難シ。又、乳孔塞リテ腫ルニハ、麦門通草ヲ加用。又、瓜呂二錢、乳香五分、以美酒送下、又、葱白湯ニテ乳房ヲ蒸ヘシ。又、乳汁ノ留リタルニハ、露蜂房一果服スルモヨシ。又、乳癰ハメイチャヲ不入シテ、腐肉トレソコナヘハ、乳漏ニナルナリ。能々破敵紙ヲ入、腐肉ヲ取ヘシ。或ハ、ロウサワートロニテンキテユルメラヲ以テ洗フ。然レ共、毎度洗フヘカラス。或ハ、膏中ニ丹礬ヲ加ヘ用ユ、煎湯ハ大牡ニ伯州ヲ兼用ス。后ニ白膿少シツ、出テ赤肉ヲ見ル時ハ、伯州散ヲ止メ、葛根加朮附ニ粉丸、端的ヲ用ユヘシ。補ノメイチャヲサシ、ソレニテモ癒サル時ハ、切テ取ナリ。乳漏二三年モ不癒、膿水不尽モノハ、治療別ニ手段アリ。門ニ入りテ其術ヲ可得。大牡ハ毒アリテ膿少ナキニ用ユ。然シ、盜汗、発熱ナトアラハ、用ユヘカラス。初起、梅核ノ如キ者出テシツカリト硬ク、半年モシテ不痛者ハ、后次第ニ大ニナルナリ。油断スヘカラス。必ス乳岩ナリ。他ノ症ハ、必ス痛ムカ、又、半年モデツトシテ居ヌモノナリ。乳核ハ乳岩トハ違ヒ、何トナクヤワラカナリ。久シク消セス。折々核痛ムナリ。又、膿ニナラヌモノハ、夏枯草煎宜シ。又、乳房ニ小核二ツモ三ツモ出ルヲ乳癰ト云。是モ夏枯草煎ヲ用ユヘシ。乳病ノ事ハ別ニ委シク別ニ乳疾方箋ニ論シ置リ。尋テ見ルヘシ。²⁹⁾

以上の3つの説明文を比較すると、例えば「二十一種本」の「八物湯ニ神曲麦芽」や「葛根加桔石或柴胡加石括萎橘葉散」は、「鶚軒本」では「八物湯ニ神曲麦芽」や「葛根加桔石更石羔柴胡加石括萎橘葉」、そして「大塚本」では「八物湯内加麴麥」や「葛根加桔石或ハ柴胡加石或ハ瓜蒌橘葉散」とあるように、記載された処方名に若干の差異が認められるものの、その他の文においては、全体として大きな差がないことが理解されよう。「也」と「なり」、「時」と「寸」、送り仮名の違いなどの差は、しばしば書写時に認められるものである。しかし、最も大きな差は、末尾に参考文献として掲げた書名である。「二十一種本」では「乳

岩準附録」となっているが、「鶚軒本」と「大塚本」では「乳疾方箋」と記述されており、全く異なっている。この違いは写本の系統を明らかにする上で甚だ重要であるが、このことについては後の節で詳述する。

「乳癰」は「外科正宗」では「卷三」の「乳癰論第三十一附乳岩」³⁰⁾に記述されている。その内容を掻い摘んで以下に記す。この節は「前言」（この見出しはないが、これに相当する）、「乳癰乳岩看法」、「乳癰乳岩治法」、「乳癰治驗」、「乳癰主治方」の5項から成っている。

まず「前言」においては、乳病の病因について論じ、乳房は陽明胃経、乳頭は厥陰肝経に所属し、母の栄養が整わなければ胃汁が濁り停滞して膿をなすとし、また「憂鬱」は肝を傷害して肝気が滞り、乳房に腫を結ぶことになるとしている。「憂鬱」が核を結ぶ原因に及んで記述した「憂鬱傷肝思慮傷脾。積想在心所願不得志者。致経絡痞澁。聚結成核。初如豆大。漸若棋子。半年一年。二載三載。不疼不癢漸漸而大。始生疼痛。痛則無解。日後腫如堆栗。或覆碗。紫色氣穢。漸漸潰爛。深者如岩穴。凸者若泛蓮。疼痛連心。出血作臭。其時五臟俱衰。四大不救。名曰乳岩。凡犯此者。百人百必死如此症。」の120字は殆んどそのまま青洲の「乳巖治驗録」³¹⁾の2丁表に「外科正宗曰」として118字が引用されている。早期の治療が効果的であるとしながらも、中年以降の寡婦では死期が早まるとし、ただ極めて初期においては、針灸、核内への氷蠟散條の挿入などで対処することで、核が自落することもあるとしている。男子の乳房疾患は稀であるが、肝腎を損なうためとし、腎気を補う処方が有効であるという。妊娠中の乳癰を「内吹」と言い、出産後の乳癰は乳癰が治りにくいとしている。ここでは産後の「乳癰」を意味する「外吹」についての言及は見られない。

「乳癰乳岩看法」の項では、「乳癰」の症状が前半に、「乳岩」の症状が後半に記述されている。すでに「腫」が形成されて「不熱不紅」、「堅硬如石」、「口乾不眠」、「胸痞食少」の者、そして「腫」が「已潰無膿」、「正頭腐爛」（腫瘍の中心が潰瘍を形成している状態）、「腫勢愈高」、「痛勢愈盛」

で流血する者は死亡するとしている。

「乳癰乳岩治法」の項では、初期の「癸熱惡寒」は「邪」が未だ体の「表」にあるから、これを散ずれば良いとする。「癸熱惡心」を欠き、「嘔吐」、「口渴」、「胸膈不利」を訴える場合はこれらを除く。「憂鬱」などで肝脾を傷め「腫」が出来た場合は、その鬱滞をなくす。「膿」のための腫脹し痛みを伴う場合は、急いで切開する。「乳癰」が破れて膿水が止まらず、痛みが続く場合は、肝脾胃を補い、気血を補うことが肝要であるという。

「乳癰治験」の項では、8症例を掲げて論じている。症例1~4と症例6~8は女性の患者、症例5は男性の患者である。症例1, 2と4は「乳癰」で、薬物療法のみで治癒したが、症例3では膿癰を形成し、針をして碗ほどの膿汁が出て治癒した。症例5の男子は、年齢50過ぎであったが、左乳に腫瘍が出来、半年ばかりで痛みが強く潰瘍を形成した。薬物療法を続けたが、病勢を抑えることは出来ず、それ以上の治療はせずに死亡した。症例6の患者は、腫瘍が出来て3年、左乳の「腫」は石の如く硬く、表面は「紫色」で光沢はなかった。治療をしなかった。症例7も女性の左乳の乳岩で、複数の腫瘍が見られ、治療せずに死亡した。症例8も女性で、「乳岩」は潰瘍化して「泛蓮」のようになり、「流血不禁」の状態で死亡した。最後の症例6~8の3症例については、青洲の「乳巖治験録」³¹⁾の2丁裏から3丁裏にかけて「正宗曰」として文章がそのまま引用されている。しかし、これらの症例は「瘍科瑣言」の中では、前述した3写本の引用文に見られるように全く言及されていない。

「乳癰主治方」は乳癰に対する処方などを列挙したものであるが、煩を厭わずそれらを以下に掲げる。

牛蒡子湯、橘葉散、清肝解鬱湯、鹿角散、回乳四物湯、灸乳腫妙方、益氣養榮湯、治乳便用方、下乳天漿散、木香餅、乳癰応用方（以下を含む。十全大補湯、八珍湯、逍遙散、氷蠶散、阿魏化痞膏、托裏消毒散）

以上、述べてきたことによって、「瘍科瑣言」の全体の構成、すなわち外科的疾患とその配列は全面的に「外科正宗」¹¹⁾に従ったものであるが、個々の疾患の説明文の内容に関しては、「外科正宗」¹¹⁾の記述とは全く異なっており、青洲なりに疾患の概要を咀嚼理解して、それに自己の経験を付け加えて記述したものと見えよう。

7. 「瘍科瑣言」の「誤吞針鉄骨硬咽喉」と「外科正宗」の「誤吞針鉄骨硬咽喉第三百三十四」

もう一項目「瘍科瑣言」と「外科正宗」¹¹⁾の疾患説明文を比較して見たい。「二十一種本」の「誤吞針鉄骨硬咽喉」の項では以下のようにになっている。句読点は著者による。

魚骨ノ咽ニ立タルニ、酢一合ヲ五勺位ニ煎シテ服サシム。又、鵜ノ腹中ニアル虫ヲ取乾シ置キ末ニシテ少シ用。

又、柚ノ実霜一味ヲ用テ奇妙也。喉痺及竹木刺ニ妙ナリ。又鳳仙白花、鬼灯、右霜ヲ酢ニテトキ用。餅ノ咽ニツマリタルハ、胡麻油一味服サシムヘシ。又酢ヲ煎シテ用ルモヨシ。

鉄針ナト肉中ニ入テ不出ハ、磁石ノ末ヲ瘡口ニヌレハ、即時ニ抜ルナリ。³²⁾

「鶚軒本」のこの項³³⁾は「二十一種本」と殆ど同文であるが、「大塚本」²⁹⁾では、上記に続いて、次の文章が付け加えられている。

凡、物咽喉中ニ障碍シテ、吐納セサル者ハ、甘桔湯加翠雲草寄効。魚鯁 山豆根二錢 甘草煎汁天石末二三分 白湯送下。又鯁魚鱗霜、又象牙末送下。(句読点一著者)

この「大塚本」の条は「二十一種本」、「鶚軒本」には見られないから、後に加筆されたものであろう。一方、「外科正宗」³⁴⁾では全く異った記述が見られる。針などを誤吞した場合には、麻を竜眼大に丸めて紐を付けて湯に浸してから飲ませる。しばらくして紐を引くと針は抜ける。抜けない時はこれを繰り返す。銅を含んだ金物の場合は葶藶

を食わせると軟らかくなり、鉄骨の場合は青菜猪脂を多食させると糞便と共に排泄される。骨の場合は玉簪花根八錢を服用させる。それでも抜けない時は烏龍針も有効である。それでも抜けない場合は、焼いて軟らかくした細鉄線を黄蠟で龍眼大に丸め、外側は絲綿で包んで喉に挿入すれば骨は自然に順下するという。

このように「瘍科瑣言」の疾患の説明文の内容と「外科正宗」の疾患の説明文の内容は全く異なることが理解できる。したがって前述したように「瘍科瑣言」は「外科正宗」を単に翻訳したものではないことは明らかである。前述したように関場不二彦は「之（「瘍科瑣言」のこと一松木）を『正宗』の演義本となせば可である。」¹⁰⁾としたが、これが誤った評価であることは自明であろう。

8. 「二十一種本」に見られる蘭説と蘭薬

第5節の末尾に「オランダ流の説を引用している個所も見られる。」と記したが、青洲が「二十一種本」³⁾の中で、オランダ流の説やオランダ流の薬物の使用に言及している個所は以下の如くである。

まず「蘭説」についてであるが、1カ所のみである。「腋癰、脇癰」の項で「二症（腋癰と脇癰のこと一松木注）共始終湿補ニヨロシ。蘭説ニ、勞擦ハ皮膚胸膈間ニ膿ヲナスト。按スルニ、脇癰ノ者ハ多ハ脉数ニシテ遂ニ労状ナル者ママアリ。氣ヲ付見ルヘシ。」（句読点一松木）とある。「蘭説」の出典は不明である。

次に使用されている蘭薬について、疾患毎にそれらの名前を原文のまま列記すると次のようになる。

療癰	カラアンスセットン
下疳	ロウサハトロ（ロウザハトロ）、テンキテルメラカルシイ、エケヒシヤコン、カラアンス
楊梅瘡	ロウサワ
癭瘤	ア、クワカルシス、カラアンコウ
肺癰	トロンス
多骨疽	ロウサワトロ、エケヒシヤコム

流注	フランド
乳癰	ロウサワトロ、テンキテルメラ
附骨疽	ロウサワトロ、ケンキテルメラ
陰瘡	セットン
大麻風	ハルサンカツハイ
鼻痔	セットン、水銀カンフラ
齒病	ロウサハトロ
牙縫出血	カルシイ、ロウサワトロ
膿窠瘡	カンフラ粉
耳病	ロウサワトロ、カルシイ、ソツヒル
黒子	セットン
重舌	ロウサワトロ
大人口破	ロウサワトロ
牛裡蹇	ハルサンコツハイ

すべての薬物を特定することは困難であるが、「ロウサワトロ」（薔薇水）が多用されていることが注目される。「ハルサンカツハイ」、「ハルサンコツハイ」はバルサムコパイパのことで、コパイパの樹脂、「エケヒシヤコン」、「エケヒシヤコム」はエジプト軟膏のこと、「ア、クワカルシス」は石灰水、「カルシイ」は石灰のことである。

9. 「瘍科瑣言」と「灯下医談前篇」の関係

「瘍科瑣言」に目次と内容が近似した写本として「灯下医談前篇」が知られている。この写本は「大塚本」近世漢方医学書集成29（「華岡青洲一」）に覆刻されている³⁵⁾。解説を書いた宗田は、「瘍科瑣言」の項で「また『灯下医談』前編に掲げる病名も、癰疽から嵌甲瘡まで全く同じ順序ではあるが、治方のみを記してあって内容は簡単である。」と記しているが¹³⁾、これは必ずしも正鵠を得ていない。もちろん、掲載された疾患の順序は大約「瘍科瑣言」に順じているが、その内容は宗田が言うように「治方」のみではない。例えば、乳房疾患については「二十一種本」³⁾では「乳癰」の部で一括して記述され、その中で「乳漏」、「乳嵩」、「乳核」、「乳癰」に簡単に触れているが、「灯下医談前篇」³⁵⁾では「乳癰」、「乳嵩」、「乳癭」、「乳核」、「乳癰」、「乳癰」がそれぞれ独立した項目として記述されている。もちろん、「治方」のみだ

表5 「灯下医談前篇」と「二十一種本」に共通する疾患（下線を付した疾患）

癰疽	腦疽	疔	瓜藤疔	火焰疔	紅糸疔
脫疽	癩癧	鬢疽	咽喉結毒	纏喉風	急喉風
單喉風	單鶩風	喉癰	附牙癰	上齶癰	上齶漏
骨槽風	牙槽風	宣露風	齒漏	小兒走馬牙疳	舌疽
舌癰	口痔	重舌	木舌	痰泡	吻疹
滯頤	齒唇	時毒	癭癰	血癰	血癭
氣癭	陰癭	肉癰	血癰	粉癰	脂癰
髮癰	骨癰	石癰	胎癰	失榮	蟲癰
痰癰	肺癰	流注	敗液流注	乳癰	乳巖
乳癭	乳核	乳癭	乳癰	附骨疽	多骨疽
鶴膝風	腸癰	臟毒	痔瘻	腸痔	疣痔
結毒痔瘻	蟲痔	脉痔	梅痔	眼痔	透腸痔
耳痔	妒精瘡	膿便毒	腐肉便毒	囊癰	懸癰
淋癰	石淋	腎癰	眠疽	楊梅瘡	結毒
婦人陰瘡	陰痔	傷寒發頤	痢后風	癩癧	癩疽
甲疽	天蛇毒	僵蟻蛙	日蝕瘡	小腹癰	鶴口疽
童泉疽	虎鬚毒	石榴疽	穿踝疽	大麻風	反花瘡
腋癰	脇癰	鼻痔	癭風	白駁風	腦漏
破傷風	跌撲	杖瘡	湯發火燒	瘡癰	牙縫出血
血筋	血痣	鷺掌風	腎囊風	疥癬	腫瘡
血風瘡	膿窠瘡	凍風	火丹	天泡	肺風
粉刺	酒皸鼻	雀斑	油風	白屑風	耳病聾耳
膝瘡	脫疽	藩唇	槽牙風	紫焰疔	漆瘡
瘞癩	疥癩	濕腫	咬傷	蝮蛇傷	鼠毒
風犬傷	婦人面皰黑斑	枯筋筋	婦人脚了作痒	手足裂破	眼丹
体氣	白禿	奶癰	蟻棋頭	小兒遺毒爛斑	蝮蝨串
小兒痘風瘡	小兒赤游舟	痘癰	痘疔	黃水瘡	大人口破
臭田螺	牛程塞	皴痛	陰虱	葡萄疫	誤吞針鉄骨硬
竹木刺	中砒毒	河豚魚毒	陰毒	委中毒	嵌甲疽
倒睫	鎖鼻	鎖耳	缺唇	六指	陰門破裂
婦人石淋	陰狐疝	鎖肛	駢指	鎖陰	男子石淋

注：「小兒走馬牙疳」，「小兒遺毒爛斑」，「小兒赤游舟」は「二十一種本」ではそれぞれ「走馬疳」，「遺毒爛斑」，「赤游舟」となっているが，内容がほぼ同じである。

けが記されているのではなく、必要に応じて症状も言及されている。このような傾向は「癰疽」，「痔」などについても同様である。したがって、独立した項目として記された疾患数は、当然「灯下医談前篇」³⁵⁾の方が「二十一種本」³⁾よりも大幅に増えて185疾患となって、「二十一種本」³⁾の114疾患より大幅に増えていることが、上記の説明で理解される。この関係を示したのが表5で、「灯下医談前篇」²⁸⁾の本文中に見出しとして披見される疾患のうち「二十一種本」³⁾の本文に見られる疾患を下線で示した。その数は102疾患に及ぶ。「二十一種本」114疾患の89.5% (102/114)

である。恐らく「瘍科瑣言」の書写が繰り返される過程で、より理解し易いように編集された結果、題名も全く異なった「灯下医談」となり、外科の総論的事項が記述されている「青洲医談」の一部と併せて「灯下医談」の前篇、後篇となったのであろう。このことを考慮すると「燈下医談」が「二十一種」の中に含まれていないことも納得されるであろう。いずれにせよ「灯下医談前篇」³⁵⁾は「瘍科瑣言」が成立した後にできたことは間違いない。

10. 「瘍科瑣言」と「瘍科神書（外科神書）」との関係

「瘍科瑣言」は華岡流外科の各論の書であり、これに対して「瘍科神書」^{2,15)}は総論の書である。この両書を併用することによって初めて華岡流外科の全貌の大約を窺い知ることが出来るし、この意味で両書は密接にして不可分の存在である。外科のみならず、臨床諸科においては、総論が各論に先じて講じられる。そのためにもどのような教科書においても総論が最初に記され、その後各論が記述されている。恐らく、青洲の時代にも、このような傾向であったと推察される。例えば、創傷の止血法、縫合法、後療法などに先行して、乳癌の外科的治療などの各論が講じられることはなかったと推察されるからである。

このように考えれば、前述した関場不二彦の「瘍科瑣言」に対する見解「便ち青洲が業を開き其徒弟に授けた最初の講本であって」¹⁰⁾の記述は適切とは考えられず、各論を記した「瘍科瑣言」は総論を記した「瘍科神書」^{2,15)}に先行して成立したとは考えられず、ほぼ同時か、少し遅れて成ったと考えられる。恐らく両書とも、数十回に渉る青洲の口述が書き貯められて、一応、著述として体をなすに至った時点でまとめられたものであろう。もちろん、外科の各論としての「瘍科瑣言」が成立する以前に、例えば個々の疾患についての著述、例えば「疔瘡辨名」の書がすでに成っていたことは、この書名が「瘍科瑣言」の「疔瘡」の項に披見されることによって証される。また「乳癰」の部には「乳岩準附録」、「乳疾方笈」なる書名が見え、個々の疾患については、それぞれ関連する書がすでに作られていたことも分かった。「乳岩準附録」、「乳疾方笈」については後述する。このように、各論としての外科疾患をまとめた「瘍科瑣言」が完成する以前に、総論としての「瘍科神書」や一部の疾患についての著述が完成していたと考えるのが妥当であろう。

11. 「瘍科瑣言」中に言及された「乳岩準附録」と「乳疾方笈」

「乳岩準附録」は「乳岩準」の附録という意味である。「乳岩準」は乳癌手術の術前術後、さらには創部の処置に際して定番として用いられる内用薬、外用薬をまとめて記した処方である。「準」とは「準繩」の「準」である。京都大学附属図書館富士川文庫所蔵の「乳岩辨」には「乳岩準」に相当する部は「乳岩集」として記述されているので「乳岩準」も区々な題名で呼ばれていたことが知られる³⁶⁾。この「乳岩準」は乳癌に関連しての処方だけであったが、乳癌以外の乳房疾患に対する処方をまとめて記したのが「乳岩準附録」である。したがって「乳岩準」が先行して作られ、その後「乳岩準附録」が生まれたことになる。現在の知見では、「乳岩準」がいつ成立したのか特定されてはいないが、図譜類を除いて乳癌手術に関しては最も古い写本の一つである1811年の千葉良蔵の「辨乳岩証并治法艸稿」（外題は「南紀青洲先生乳巖治術口授」）では、乳癌手術時に用いられる内用薬、外用薬に記述が及んでいるが、見出しとして「乳岩準」の言葉を用いていないし、「乳岩準附録」に相当する乳房疾患の記述も見られない³⁷⁾。このことからすれば、「乳岩準」は1811年頃にはまだ広く普及していなかったことが示唆される。しかし、1815年に堺で書写された一写本では「乳岩準」と「附録」（「乳岩準附録」とは記されていないが、「乳岩準」に引き続いて記されているので「乳岩準附録」であることは間違いない）が明確に区別されて記されている³⁷⁾。この写本に披見される「乳岩準」と「附録」の見出しを以下に列記すると次のようになる。処方内容と用法については省略する。

乳岩準

調榮湯

婦芍湯

抜留沙摩格泔客（「バルサムコツハイハ」のこと一松木注）

野牛膏

家猪膏
 附録
 吹乳
 集驗連堯湯 千金
 連堯湯
 神効瓜呂散 大全良方
 竜赤川湯 千金
 二誉湯
 又方
 鹿角散
 醉膏
 前瓜呂橘皮湯 奇方
 后瓜呂橘皮湯
 又方 奇方
 香魚膏
 乳頭裂
 乳癬
 土大黃膏
 乳結核
 乳腫
 乳癰
 括呂橘皮散
 神効瓜莖
 治乳岩一方
 乳岩腫痛付藥
 乳痿
 排膿散 千金

以上によって、「乳岩準」は乳癌手術に関連した処方、「乳岩準附録」は乳房疾患に関連した処方を記したものであることが明解に理解される。以下、これを「乳岩準」・「乳岩準附録」と表記する。一方「乳疾方笈」は、管見では内藤記念くすり博物館の大同文庫所蔵の一本が唯一知られている写本で、「三朮附之辨」に合冊されている³⁸⁾。全5丁で、乳房の疾患時に用いられる処方を列記したものである。

「瘍科瑣言」の「乳癰」の記述に引用された書目において、後述する表6に示す通り、著者が閲覧した54本の写本中、16本が「乳岩準附録」、29本が「乳疾方笈」となっており、「乳疾方笈」

が比較的多数を占めており、このことは当時「乳疾方笈」がそれなりに普及していたことを示唆すると思われるが、現実的には、上述したように現在、ただ一本の「乳疾方笈」の写本が知られているだけである。その見出しのみを以下に記す。

調栄湯
 当帰芍薬散 千金
 抜爾沙摩格湃霍
 野牛膏
 集驗連堯湯 千金外臺
 連堯湯 大全良方
 神効瓜呂散 大全良方
 赤竜皮湯 千金
 二誉湯
 又方
 鹿角散
 一醉膏
 前括呂橘皮湯 奇方
 后括呂橘皮湯
 又方 奇方
 香魚膏
 乳頭裂
 乳癬
 土大黃膏（「土」に点が付く一松木注）
 神効瓜呂散
 治乳癰一方 千金
 治乳用腫痛傳藥
 排膿散 千金

以上によって、「乳岩準」・「乳岩準附録」と「乳疾方笈」は内容がほぼ同じであることが分かる。両者が全く別個の著述ではなく、又同時に成立したとは考えられず、一方が他方の基になったと考えられる。そうすれば、どちらが先に成立したのかが問題になる。前者が先行して成立したという考えと、後者が先に成立したとする考えがある。

「乳岩準」・「乳岩準附録」と「乳疾方笈」を比較すると、例えば前者の「帰芍湯」,「抜留沙摩格湃客」,「竜赤皮湯」,「醉膏」が「乳疾方笈」では「当帰芍薬散」,「抜爾沙摩格湃霍」,「赤竜皮湯」,「一

表6 「瘍科瑣言」の写本の分類

上下篇	目次	冒頭疾患	引用書*	写本
(+)	(+)	「癰疽」	「乳疾方笈」	…… 麻, 研医 13944376, 研医 1394758, 鶯, 内 07558, 内 61451, 内 31780, 内 31524, 内 31793, 内 30604, 順山 9154
(+)	(+)	「癰疽」	「乳岩準附録」	…… 二十一種, 内 44296, 内 12844, 内 07388, 内 07331, 内 35693, 内 61464, 順山 9162,
(+)	(+)	「癰疽」	記載なし	…… 内 30998 (上篇のみのため)
(+)	(+)	「油風」	「乳疾方笈」	…… なし
(+)	(+)	「油風」	「乳岩準附録」	…… なし
(+)	(-)	「癰疽」	「乳疾方笈」	…… 京富 27, 内 33591,
(+)	(-)	「癰疽」	「乳岩準附録」	…… 研医 1394725, 内 26404,
(+)	(-)	「油風」	「乳疾方笈」	…… なし
(+)	(-)	「油風」	「乳岩準附録」	…… なし
(+)	(-)	他疾患	記載なし	…… 内 13729,
(-)	(+)	「癰疽」	「乳疾方笈」	…… 慶富 DIG-KEIO-646, 京富 24, 京富 26, 京富 28, 京富 29, 京富 30, 国, 研医 1394769, 山, 大塚, 内 31782, 内 35551, 内 30991, 内 31666, 内 31523, 内 34993,
(-)	(+)	「癰疽」	「乳岩準附録」	…… 宮 769, 松, 内 T0173, 内 31781, 内 31783, 東阿,
(-)	(+)	「癰疽」	記載なし	…… 内 35995
(-)	(+)	「油風」	「乳疾方笈」	…… なし
(-)	(+)	「油風」	「乳岩準附録」	…… なし
(-)	(-)	「癰疽」	「乳疾方笈」	…… なし
(-)	(-)	「癰疽」	「乳岩準附録」	…… 研医 1394714, 内 31785, 内 31784,
(-)	(-)	「油風」	「乳疾方笈」	…… なし
(-)	(-)	「油風」	「乳岩準附録」	…… なし
(-)	(-)	「油風」	書目記載なし	…… 研医 1394747
(+)	(+)	「油風」	記述なし	…… 宮 768,
(-)	(-)	?	記述なし	…… 慶富 DIG-KEIO-647,

注：大塚：近世漢方医学書集成 29 (華岡青洲 一) 所収

鶯：東京大学総合図書館鶯軒本 (VII 1902)

京富：京都大学附属図書館富士川文庫本 (24, 26, 27, 28, 29, 30)

慶富：慶応義塾大学附属図書館富士川文庫本 (DIG-KEIO-646, D-KEIO-647)

研医：研医会図書館蔵本 (1394714, 13944376, 1394758, 1394725, 1394769, 1394747)

国：国会図書館古典籍資料室蔵本 (W412-24)

順山：順天堂大学医史学研究室山崎文庫本 (9154, 9162)

東阿：東京医科歯科大学図書館阿久津文庫本 (阿 289)

内：内藤記念くすり博物館蔵本 (44296, 31782, 31785, T0173, 12844, 07388, 13729, 07331, 07558, 26404, 33591, 61451, 35551, 31780, 31781, 31524, 35995, 30998, 30991, 31784, 31666, 35693, 31783, 31523, 34993, 31793, 30604, 61464)

二十一種：武田科学振興財団杏雨書屋所蔵 (春林軒二十一種二集) (杏雨 3169)

麻：麻酔博物館蔵本 (松木明知寄託)

松：松木明知蔵本

宮：宮城県立図書館 (小西文庫本 768, 769)

山：山岸利明氏蔵本 (五十音順)

*：「乳岩準附録」「乳岩書附録」などと記されている場合も含む」と「乳疾方笈」の両者を示している場合は最初に記されている書目を採用した。

酔膏」となって用字が異なっていること、「乳岩準」・「乳岩準附録」の「家猪膏」が「乳疾方笈」では欠落していることが指摘される。さらに、「乳岩準」・「乳岩準附録」の見出しは30項目であるが、「乳疾方笈」では23項目と少なくなっている。

これは、とくにこの「乳結核」以下の9項目が後者ではわずか4項目に減少していることによる。さらに、「乳岩準」・「乳岩準附録」において分離して記述されていた乳癌手術に関連した処方と乳房疾患に関連した処方が、「乳疾方笈」では区別

なく記されていることが大きな差である。「乳疾方笈」の写本が極めて稀であること、手術に関連した処方と乳房疾患の処方の区別がなくなっていること、処方数が少なくなっていることなどを勘案すると、「乳疾方笈」は「乳岩準」・「乳岩準附録」から抄出した一種の「異名同書」とも推察され、このように考えれば、「乳疾方笈」の成立は「乳岩準」,「乳岩準附録」に遅れることになる。著者旧蔵の「瘍科瑣言」は1824年、難波抱節の門人永原子睦が書写した比較的古い写本（「永原本」）であるが、この写本には「乳疾方笈」とあって、これに「乳岩準附録ノ事」と傍注が施されている。このことは「乳疾方笈」の方が遅れて成立したことを示唆する。次節で述べる一写本は「永原本」よりも書写年が古いと考えられるが、この写本では「乳岩準附録」とある。したがって、「乳癰」の末尾において「乳岩準附録」とある写本が、「乳疾方笈」と記した写本よりも古い形態のものであると推測される。ただし、現時点では「乳岩準」・「乳岩準附録」,「乳疾方笈」の何れについても、それらの成立年に関して決定的な証拠はなく、いずれが先行して成立したかを正確に特定することは出来ないので、新史料の出現を待ち後日を期したい。

12. 「瘍科瑣言」の写本の系統

写本の系統を決定する上で、「上篇」,「下篇」に分かれているか、「目次」ないし「目録」の有無も重要な因子なのであるが、これだけでは系統の新旧を決める手掛かりにはならない。「瘍科瑣言」に限って言えば、前節で述べた「乳癰」の項の引用書名が「乳岩準附録」であるか、「乳疾方笈」であるかが一つの重要な手掛かりになる。これまで著者が閲覧できた写本を「上」,「下」に分かれているか、目次（目録）の有無、本文冒頭の疾患、引用書目の違い、すなわち「乳岩準附録」か「乳疾方笈」かによって分類すると表6ようになる。これによれば「乳疾方笈」を引用書目とするとする写本がより多く流布したことが分かる。しかし、現在の時点では、写本の系統を確然と分類する根拠に甚だ乏しいと言わざるを得ない。

13. 「瘍科瑣言」の成立時期について

家蔵の「瘍科瑣言」はその成立を考える上で重要な写本である。先ずその書誌を述べる。題箋を欠くが、表紙に直接「瘍科瑣言」と記されており、内題も「瘍科瑣言」である。丁寧に書写された一冊本である。79丁で左右双辺、有界で半丁10行。一行約28字。1丁は白紙で、2-4丁は目次であるが、「目次」,「目録」の文字はない。5丁表から本文である。疾患の項目として「癰疽」,「腦疽」,「疔疽」から「失榮」,「委中毒」,「嵌甲疽」まで115疾患を示しているが、「二十一種本」に見られない「嵌甲疽」が最後に加えられているので、一つ多い115疾患になっている。

5丁表冒頭に「瘍科瑣言／青洲先生口授／門人播磨三輪敬節述／淡路小川朝菴校」とある。（写真1）播磨の「三輪敬節」については、門人録³⁹⁾によれば、1807年9月の入門で、「三輪敬節 播

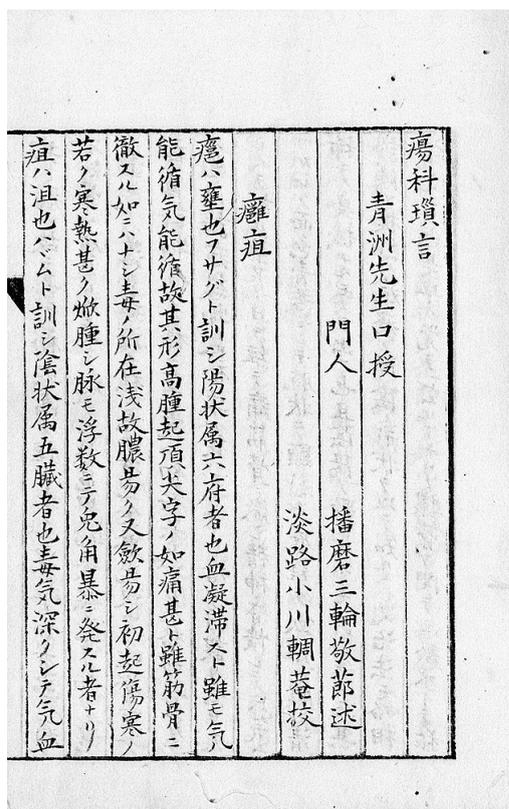


写真1

州揖西郡竜野正条」とある。名に「節」と「節」の違いはあるが、「播磨」からの春林軒の入門者に「三輪」姓の人物が他にいないことから、同一人物と見做して差し支えない。したがって、この写本を以下「三輪本」と称する。三輪は播磨からの最初の入門者であった。地元の史書には「三輪敬節」として、その名前が見え、父の良琢（号は華岡）も正条村の医者で、敬節は揖川と号して1837年に54歳（数え）で没したから、1784年の生まれである。青洲の春林軒以外の門に学んだかなどの経歴の詳細は知られていない^{40,41}。しかし、春林軒の塾頭を務めたことが知られている⁴²。

淡路の「小川輞菴」は、同じく春林軒の門人録には1808年の入門で、「小川輔庵 景多 字之葆 淡州三原郡七川浦」とある⁴³。「七川浦」は正しくは「志知川浦」である。ここでも「輞」と「輔」の違いがあるが写本にしたがって「輞」とする。小川も淡路からの最初の入門者であった。小川の名前は地元の郷土史に披見されないが、三輪と同様に春林軒で塾頭を務めたことが知られている⁴²。三輪、小川が共に塾頭を経験していることからすれば、学力においてもそれなりの力が認められていたのであろう。

この三輪本が三輪自身による書写であるかどうか断定できない。三輪の筆跡が他に知られていないからである。しかし、例えば三輪による稿本でないにせよ、少なくとも三輪の稿本の形態を善く伝えていることは間違いない。この写本と同じく三輪と小川の名をフルネームで記した写本は「花岡家方瘍科瑣言」（内藤記念くすり博物館所蔵大同文庫 蔵書番号34993）である。書写年の記載はないが、家蔵の一本に比して後年の書写と思われる。

同じく、本文冒頭に三輪と小川の名前を記した写本（慶應大富士川本 DIG-KEIO-646）があるが、これには「播 三 敬節撰／淡 小 輞庵校」とあって姓名が略されて記入されている。彼らを善く知る人物が家蔵の写本の系統の一本を書写した際、三輪と小川の名前を略して書いたと解釈したい。この慶應大富士川本と同じように三輪と小川の名前を略して記した写本は国会図書館古典籍資料室所蔵の「瘍科瑣言」（請求番号W412-24）、山

岸本、内藤記念くすり博物館大同文庫本（蔵書番号31782）である。これらは同じ系統に属する写本であるが、内容を検討しても、いずれが古いかは分からない。

三輪敬節は1807年9月入門している。本稿で参考にした「鶉軒本」の圓山道伯は1812年1月に入門したが、早くも同年3月末までに「瘍科瑣言」を書写している。このことを考慮すると、三輪も「瘍科瑣言」を遅くとも半年後の1808年2月頃までの間に書写したと仮定することは許されるであろう。「瘍科瑣言」が華岡流外科の基本的著述であったからである。そして、その校定を1808年に郷里に近い淡路から入門した小川輞菴に依頼したのであろう。このことを考慮すれば、三輪本は1808年末までには成立していたと思われる。

以上の事情を考慮に容れれば、三輪の名前を冒頭に記したいいわゆる「三輪本」が「非三輪本」より古く、そして同じ「三輪本」でも引用書目が「乳岩準附録」である写本が、引用書目を「乳疾方笈」とする写本よりも古く成立したと考えられる。

「瘍科瑣言」は外科領域の疾患名を挙げて、その病理、治療法、処方を書き記したものであるから、その本文中に当該写本の成立年の特定に資するような記述を欠くのは当然である。前述したように「書名」のみが引用されている「乳岩準附録」、「乳疾方笈」、「疔瘡辨名」にしてもそれらの成立年が特定されていないのであるから、これらを以って「瘍科瑣言」の成立年を特定することは出来ないが、これらの書が「瘍科瑣言」に先んじて完成していたことだけは明らかである。

「瘍科瑣言」には年代が特定できる社会的出来事が唯一カ所記述されている。「二十一種本」の「時毒」の項の冒頭に次のようにある。「時毒ハ俗ニ云蝦蟇瘰ナリ。江戸ハサシハコト云。天行ノ時氣ニ感シテ生ス。多ク耳ノ前後ニ生ス。緩ナル症ハ馬刀癩ニ疑似スルナリ。」⁴⁴（異体字は常用漢字にした。句読点一松木）「江戸ハサシハコト云」の「サシハコ」は「はさみばこかぜ」（鉋箱風）、つまりオタフク風のことと思われる。1788年に

全国的に流行した。富士川 游の「日本疾病史」には「正月、京師大火後、瘟疫流行」⁴⁵⁾と記しているが、この記述のみではこの「瘟疫」がどのような疾患であるかはわからない。しかし、本州北端の津軽でも流行し、地元の史料に「天明いの年挟箱と云病時行れり、風邪の気味にて頬腫れたり。」とある⁴⁶⁾。この流行は1788年の流行であるから、青洲が京都遊学を終えて帰郷してから3年後のことである。したがって「サシハコ」流行の記述は「瘍科瑣言」成立年代、とくに上限と下限の特定には役立たない。

14. 「瘍科瑣言」の写本が多く書写された理由

「瘍科瑣言」が多くの門人やその他の医師によって書写された背景にはいくつかの理由が存在すると思われる。第一は、「瘍科瑣言」が華岡流外科の骨格的著述であったことによる。「瘍科瑣言」に収載された外科疾患とそれらの配列は、中国の医書「外科正宗」¹⁾に記された疾患とそれらの配列に従っている。しかし、その記述の内容は「外科正宗」¹⁾とは全く異なって青洲自身の経験を述べたものとなっている。これは当然のこと、門人たちは「外科正宗」の外科を学ぶために春林軒に入門したのではなくして、華岡流の外科を学ぶために入門したのである。青洲は実地における修練を重視したが、それに劣らず実地訓練をより実りあり、効率的なものにするために、基本的な医書を読むことも不可欠とした。そして華岡流外科の基本となる書は「瘍科神書」²⁾と「瘍科瑣言」³⁾であった。前者は華岡流外科の総論であり、後者は各論であった。したがって両書は華岡流外科の基本中の基本の書であったがゆえに多くの門人によって書写されたのであろう。

第二の理由として、次のようなことが挙げられると思われる。漢方の外科を学ぶ上で「外科正宗」は重要な書であった。しかし門人の誰もが「外科正宗」を自由に読めて理解できるほど、漢文を読む力量があった訳ではなかったと思われる。その分、「外科正宗」をモデルにした「瘍科瑣言」を熟読したのであろう。

第三の理由として、すべての写本が春林軒にお

いてのみ書写されたとは考えられないからである。書写者、書写年が明記されている写本は限られており、明記されていない場合は、春林軒や合水堂以外の場所で書写された可能性が十分にある。華岡流の医術を学びたいと思っても、それが実現できない医師も少なくなかったと考えられ、そのような人たちによっても、多くの写本が作られたことは否定できない。

おわりに

「瘍科瑣言」は華岡流外科の骨格をなす著述である。収載されている外科疾患とそれらの記載順序は「外科正宗」に準拠しているが、記述内容は青洲の経験に基づいており、「外科正宗」の記述とは全く異なっている。外科疾患の記述という性質から「異名同書」や「同名異書」は少なく、この点において華岡流外科の総論を述べた「瘍科神書」とは大いに異なっている。現在、「瘍科瑣言」という題名の写本だけでも100本以上の存在が知られており、この書が門人たちの間で広く活用されたことが窺われるが、文化年代(1804~1818)の写本は、管見ではわずか2本である。閲覧できた54本の写本から考察すれば、写本間の差異は甚だしくない。これは外科疾患の説明という著述の性質に起因している。

1807年9月に春林軒に入門した播磨の三輪敬節が「瘍科瑣言」を書写していることを考慮すれば、「瘍科瑣言」は遅くとも1808年3月末までには成立していた可能性が高い。そして「乳岩準附録」が三輪の写本中に引用されていることからすれば、「乳岩準」、「乳岩準附録」もまたその頃までに完成していたことが窺われる。

擲筆するに際して、貴重な写本の閲覧に便宜を図って戴いた下記の施設に対して謝意を表す。

京都大学附属図書館、研医会図書館、国会図書館古典籍資料室、順天堂大学医学部医史学研究室、武田科学振興財団杏雨書屋、東京医科歯科大学図書館、東京大学総合図書館、内藤記念くすり博物館、山岸利明博士(鯖江市)。(五十音順)

文献および注

- 1) 松木明知. 華岡青洲研究の新展開. 東京：真興交易(株) 医書出版部；2013. p.45-55
- 2) 小林定誠. 春林軒廿一種集序(嘉永三年) 青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種初集 公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 杏3169-1
- 3) 瘍科瑣言. 青洲華岡先生遺教 春林軒二十一種二集. 公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵. 請求番号 杏3169-2
- 4) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂書店；1923. p.381-387
- 5) 安江良介. 補訂版国書総目録. 第七巻. 東京：岩波書店；1990. p.874
- 6) 日本古典籍総合目録データベース (<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/>) 2017年7月9日アクセス
- 7) 日本麻酔科学会の「麻酔博物館」所蔵(松木明知寄託)の「瘍科瑣言」は青洲の高弟難波抱節の門人永原子陸が1824年に金川の思誠堂で書写した写本である.
- 8) 文献4. p.381-430
- 9) 文献4. p.252-254
- 10) 関場不二彦. 西医学東漸史話. 東京：吐鳳堂書店；1933. p.281
- 11) 陳 実功. 外科正宗. 小曾戸 洋, 真柳 誠編. 和刻漢籍医書集成/第十三輯. 東京：エンタプライズ；1991
- 12) 文献10. p.282
- 13) 宗田 一. 記載書解題. 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29(華岡青洲 一). 東京：名著出版；1980. p.56
- 14) 京都大学附属図書館富士川文庫 ヨ/32
- 15) 松木明知. 華岡青洲による「瘍科神書」の成立とその各種写本に関する研究. 日本医史学雑誌 2017；63(3):275-292
- 16) 京都大学附属図書館富士川文庫 ケ/94
- 17) 京都大学附属図書館富士川文庫 ヨ/23
- 18) 文献17. 「巻上」本文31丁表~32丁表
- 19) 文献2. 15丁表~16丁表
- 20) 東京大学総合図書館鶯軒文庫所蔵. 請求番号 VII-1902
無窮会図書館に所蔵されている「瘍科瑣言」の一本は1809年の書写になるが、現在、この図書館は改装中で、閲覧が出来ない状態にある。詳細は後日を期したい。著者が閲覧できなかった他の写本で文化年代の年紀を有するものはなかった。
- 21) 文献4. p.489
- 22) 梶谷光弘. 華岡直道・青洲・鷺洲・厚堂が主宰した華岡家へ入門した門人たち. 医聖華岡青洲顕彰会 華岡青洲研究事業 研究論文 2017；(1):41
- 23) 阿哲郡教育会編. 阿哲郡誌(下巻). 新見：阿哲郡教育会；1931. p.835-836
- 24) 新見市史編纂委員会編. 新見市史(通史編 上巻). 新見：新見市；1993. p.926
- 25) 瘍科瑣言(大塚本). 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29(華岡青洲 一). 東京：名著出版；1980. p.97-242
- 26) 閲覧した写本の一覧(本数の多い順)
内藤記念くすり博物館(大同文庫)28本, 研医会図書館6本, 京都大学附属図書館(富士川文庫)6本, 宮城県立図書館2本, 慶応大学(富士川文庫)2本, 順天堂大学医学部医史学研究室(山崎文庫)2本, 東京大学総合図書館(鶯軒文庫)1本, 国会図書館1本, 東京医科歯科大学図書館(阿久津文庫)1本, 杏雨書屋(二十一種本)1本, 大塚本1本, 山岸本 1本, 日本麻酔科学会「麻酔博物館」1本, 家蔵 1本, 合計54本.
- 27) 文献3. 「上篇」の84丁裏~86丁表
- 28) 文献20. 34丁表-35丁表
- 29) 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29(華岡青洲 一). 東京：名著出版；1980. p.238-239
- 30) 文献11. p.119-124
- 31) 以下の著書の巻頭にカラー写真で全丁を示してある.
松木明知. 華岡青洲の新研究. 弘前：松木明知；2002
- 32) 文献3. 「下篇」の39丁表と裏
- 33) 文献20. 68丁裏と69丁表
- 34) 文献11. p.212
- 35) 文献29. p.243-365
- 36) 松木明知. 華岡青洲の「乳岩準」および「乳岩準附録」の成立に関する一考察. 日本医史学雑誌 2017；63(1):53-59
- 37) 京都大学附属図書館富士川文庫 ニ/30
- 38) くすり博物館大同文庫所蔵 「三疔附之辨」に合冊蔵書番号490. 94サ
- 39) 文献22. p.36
- 40) 揖保川町史編纂委員会編. 揖保川町史. 揖保川：揖保川町；1972. p.280-282
- 41) 揖保川町史編纂専門委員会編. 揖保川町史(第二巻, 本文編Ⅱ). 揖保川：揖保川町；2004. p.585-586
- 42) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖華岡青洲. 和歌山：医聖華岡青洲先生顕彰会；1964. p.184
- 43) 文献22. p.50
- 44) 文献3. 「上篇」の76丁裏-77丁表
- 45) 富士川 游. 日本疾病史(東洋文庫133). 東京：平凡社；1979. p.59
- 46) 松木明知. 明治前津軽疫癘史年表. 統津軽の医史. 弘前：津軽書房；1975. p.83

A Study on *Yokasagen* by Seishu Hanaoka: Concerning its Contents, Appearance, and Classification of Manuscripts

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Yokasagen is one of the most important writings by Seishu Hanaoka about his style of surgery. It describes about a hundred and fourteen surgical diseases and their signs, symptoms, and treatments. The names and descriptions of the diseases follow the same order as those in the Chinese surgical textbook *Gekaseiso* (wàikē zhèngzōng), but the explanations of the diseases come from Hanaoka's own experiences. After a meticulous examination of fifty-four *Yokasagen* manuscripts, it was concluded that the one transcribed by Keisetsu Miwa, who joined Shunrinken in 1807, is the oldest. It is likely to have appeared in 1808. The manuscripts can be classified into two categories: Miwa and non-Miwa.

Key words: Seishu Hanaoka, *Yokasagen*, *Gekaseiso*, Keisetsu Miwa, 1808